

---

# 最弱宰相は奔走する

方位磁針

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最弱宰相は奔走する

### 【Nコード】

N9900Y

### 【作者名】

方位磁針

### 【あらすじ】

主人公の性格は『明るい』・『強気』・『元気』というのが王道の中、『ビビリ』・『弱虫』・『すぐ泣く』魔族の少女が主人公。周りの魔族から馬鹿にされまくりな、彼女です。一応、宰相してます。でも、嫌われています。『最強』なはずなのに、この性格で上手くその要素を活かしきれません。そんな時、魔王様が人間を滅ぼす、だなんて言ってきました。大切な人を守るため、チキンながらも精一杯止めたいと思います。だがしかし、やっぱり怖い！！そんな宰相が奔走するお話です。

？（前書き）

よろしく願います。

？

ここは、ビフレスト。魔族が治めるアールヴヘイムの隣にある。ここを治める伯爵の敷地で二人の少年少女が戯れていた。

「エドマンドー！私と遊びやがれー」

「うわっ、ラナ！お前また来たのかよ」

肩くらいの黒い髪をなびかせ、16・17歳の少女が、やはり同年頃の金髪の少年に駆け寄る。そして、少年の背中に飛び乗るようにして、身体ごとぶつかつた。そんな少女に、少年は嫌そうな顔をしながらも、ちゃんと受け止める。そんな少年の心遣いがまた嬉しいらしく、背中におぶさつたまま少女はまた笑った。

「へへ、今日はアリーがアップルパイを焼くと言っていたからね！  
」

「なんで、ただ食いにくるお前に、感謝しなきゃならん！」

「私は魔国の宰相だよー！？うやまえーうやまえー」

ラナと呼ばれた少女は、エドマンドという少年の背中から降り、彼の正面に立つ。ふふん、と自慢そうに胸を張った。だが、エドモンドは、ラナを胡散臭そうに見る。そして、嫌味たっぷりの笑みを浮かべた。

「ったく。今日のお勉強はどうしたのですか、宰相殿？」

「うつ！それはー、ええとー」

エドマンズの質問にラナが視線を泳がせていると、鈴をころがすような笑い声がした。

「ふふ、またお勉強抜け出してきたんでしょう？ダメよー、またユピテルさんが困ってしまうわ」

「アリーー！！」

20歳位の金色の長い髪を上品に結っている女性が、お盆を持ってラナとエドマンズに近寄る。彼らを見つめると、碧眼の瞳を、優しく細めた。焼きたてなのだろう。お盆には香ばしい匂いをさせたアップルパイが、乗ってある。

「わーい、アリーのアップルパイだー！」

「そんなに喜んでもらえて、嬉しいわ。さあ、召し上がれ？」

エドマンズは、アップルパイに飛びつくラナを、呆れたように見た。そして、諦めたようにため息をつく。ラナは切り分けられ、皿にのったアップルパイを嬉々としてアリーから受け取る。

「姉さん、そんなにラナを甘やかしちゃだめだよ」

「あら？そんなつもりは無かったんだけど……。ラナちゃんが可愛いから、そうなっちゃうのかしら」

アリーは頬に手を当てた。ラナと目が合うと、ふんわりと微笑む。

「えへへへへー」

ラナは照れたように、頬を赤めた。

アリーはとっても心根の優しい女性だ。弟のエドモンドと同様光沢を放つ金髪をなびかせ、おだやかにいつも笑っているアリーは、ラナの憧れだ。ラナはいつかこんな女性になりたいと思っていたし、こんなお姉ちゃんが欲しいなーとも考えていた。

「・・・『可愛い』ねえ？」

エドモンドは、ジロジロとラナを見てくる。何か言いたげな視線に、アップルパイにかぶり付いていたラナは、ムツとした。

「何だよ、その目」

「いやー？ただ、もう少し乙女らしい行動ができんのかなーと思いますて」

「なにさー！」

ムキーと手を振り上げて怒るラナを見て、エドモンドがニヤニヤと笑う。そんな二人の攻防戦をアリーが「まあまあ」と言いながらも、おだやかに見守る。

こんな、暖かいこの空気がラナは大好きだ。

——魔国では、こんなことは無いから。

「ラナ様~~~~~！！探しましたよ！また、こんなところに居たのですか」

そう言つて、ほんわかした空気に飛び込んできたのは、白く小さい姿をした竜。黒いつぶらな瞳は、今は怒ったように細められている。竜の姿をみると、ラナは隠さずに嫌そうな顔をした。

「げっ！もう来たの？」

「『げっ』とは何ですか！久しぶりに『私がお茶を入れてあげる、ユピテル』と可愛く言つて下さったから、感動しむせび泣きながら飲んだのに！痺れ薬を入れたでしょ！ラナ様！！ユピテルは悲しゅうございます！」

「そうだったけ？」

小さな瞳から、涙を滂沱と流す竜。いつものことなので、ラナは軽く無視をして構わずアップルパイを口に放り込んだ。ユピテルは、ラナのお目付け役である。だが、事あるごとに五月蠅いので、ラナはよく煙たがっていた。

「ラナ様——！！！！」

「うるさいなあ」

「うつ、うつ、ユピテルめは、ユピテルめは、ラナ様に立派な宰相になつていただきたい、と日々願っているのです。なのに、なに、お勉強サボるなんて——！！！！」

「勉強嫌い」

「そんなこと言わずに！」

「イ・ヤ」

「そんな〜」

ユピテルは、パタパタと羽を忙しく動かして、ラナの周りを飛び回った。なんとか、主人を勉強させようと必死なのだ。だが、ラナはそんな彼など知るもんか、とばかりの態度だ。

さすがにラナにまったく相手にされないユピテルが不憫に思ったのか、エドモンドは仕方なしにラナを説得してきた。

「おい、ラナ。今日はそのアップルパイ食べたら、帰れよ？俺もこのあと学びがあるしな」

「えーーーーー!？」

「ラナちゃん、その残りのアップルパイお土産に包んであげるわ」

「本当？ありがとう！」

ラナは不服そうにしたが、アリーの言葉に顔を輝かせる。

何となく、二人に丸め込まれてしまった感じはする。もう少しここに居たかったが、二人にそう言われたならしょうがない。ラナは食べていたアップルパイをほお張り、帰る準備をした。

「ちえ！もつと遊びたかったのに」

ラナは、ユピテルにぶら下がりながら、毒づいた。30センチ程の大きな竜のユピテルだが、魔族であるため以外に力持ちだ。ラナをこうして脚につかまらせ跳ぶのは朝飯まえなのだ。ラナとユピテルは己の領にある城に帰るべく、空をぶかぶかと飛んでいた。

「まだ、そんなことを言う。しっかりとアップルパイ貰ってきたのですから、良いではありませんか」

ラナの腕の中には、しっかりと貰ったアップルパイの包みが抱えられていた。ちゃっかりとほとんどのアップルパイを持ち帰るラナを、ユピテルは呆れた様に見た。しかし、ラナは不完全燃焼のようで、口を尖らせる。

「アップルパイ食べて、遊びたかったの！最近あんまりエドモンド構ってくれないし・・・」

「まあ、彼も伯爵の子ですからね、いろいろ忙しくなっているのでしょう」

「ブー」

「それに、ラナ様だって、本当は宰相のお勉強しなくてはいけないんですよ！」

「うぐっ！」

「いい機会です。エドモンドも伯爵の息子として頑張っているのですから、ラナ様も見習いなさい」

「ぶぐう」

また始まったユピテルのお説教に、ラナはほっぺを膨らませた。ユピテルの説教は始まると、長いのだ。しかも、今はユピテルの脚につかまって飛んでいるので、どこへも逃げようが無い。ラナはくどくどと展開する説教を首をすくめて、聞くしかなかった。

説教が終わると、ラナは安堵のため息をつく。ユピテルは満足したように、羽を動かした。ラナは彼に元気を奪われた心地だ。己の城が見えてきて、視線が自然と城へ向かう。

ユピテルはそんなラナを気まぐれに見た。一瞬ためらうようにした後、重々しく口を開く。

「・・・それと、ラナ様。明日は魔国で会議があります。朝一番で出かけるので、準備してくださいね？」

先ほどのお説教口調をあらためて、ユピテルは静かに話した。視線は城がある方向を向いているが、ラナを気にしている気配が伺えた。

「分かった」

ラナも神妙に頷いた。やはり、視線は城に向いたままだ。ユピテルがどうして口調をあらためて、ラナに明日のことを伝えたのか、分かっているからだ。

宰相であるラナは、当然魔国の会議に出席することになる。だけど、ラナの存在は無に等しいものであり、嘲笑の的だからだ。

——何故なら、ラナは『最弱宰相』なのだから——

？

「——ということで、アリカヤの地にいる魔族の統制は、4武将の一人クロノスに任せることにする。異論は無いな？」

それだけで存在感がある紅の長い髪と瞳を持つ、魔王は今回の会議で決まったことを述べた。魔王の名はソル。伝説の存在となっている『白い恐怖』とも呼ばれた先代の魔王の地位を受け継いだ豪傑だ。彼は、カリスマ性に溢れ魔王の地位に納まると、先代の魔王が居なくなり統制がとれなかった魔族を一気にまとめてしまった。もはや、魔族らの絶対的な存在である。いかにせん、王という気質のせいかな傲慢な態度が目立つが、それもまた彼の魅力と、彼を慕う魔族は多い。

「カイルス、お前はどうか？」

「意義ありません」

「ヴィクトリア、お前は？」

「ありませんわ」

「デイス」

「ないですよ」

順々に、会議に集まった者たちに王が、異議がないか確認していく。ラナは、いつ魔王様が自分に確認してくるか、待った。

「クラブ、お前は？」

「皆さん、同様にありません」

「そうか。では、全員異議なしということで、今回の議題は終わりとする」

従順に返事をする部下たち。ソルは、満足そうに頷いた。

（・・・うん。私確認されなかったよね？飛ばされたよね？全員異議なしじゃないから、一人異議なしかどうか聞かれてない人いますからっ！！）

己の名前を呼ばれなかったことに戸惑うラナが魔王様を見ていると、くすくすと忍び笑いが聞こえた。そこで初めて、このことがわざとされたことだと、気付く。思わず、笑い声がした方向を見ると、四武将の一人であるヴィクトリアが扇で口元を隠している。目が合うと、馬鹿にした笑みを浮かべてきた。

（あー、またか）

ラナは目を伏せた。

このようなことは初めてではない。一応、ラナは宰相という地位にいるが、魔族のほとんどがラナに敬意なんてはらうことなんてないし、認めていない。宰相という地位は代々ラナの一族が受けついできたが、もはやその中身は伴っていないのだ。

だから、『最弱宰相』と呼ばれ、馬鹿にされている。裏でこそそと悪口なんて言われない。もはや堂々とラナを目の前にして、悪口を言ってくるレベルだ。

この原因は、ラナの家系、スヴァルト・アールヴヘイムにある。ラナの先祖はもと人間に親善派なのだ。何かと、魔族が人間を滅ぼそうとするたびに、阻止してきた。そんなラナたちの存在は、人間を家畜並みに考える魔族たちにとっては、目の上のたんこぶのような存在なのだ。

そして、もう一つの原因はラナの性格だ。

何を隠そう、ラナはとてもビビリな性格なのである。力がすべての魔族の中で、チキン丸出して魔力も微弱にしかないラナは、魔族たちにとって嘲笑の的だった。

宰相という肩書きは立派なラナは、魔族たちにとって汚点のような扱いをされている。

実際今も魔王ソルは何気ない顔をして、ラナを無視し続けていた。無言のラナへの制裁なのだろう。彼からはラナを毛嫌いしているのが、いつも感じられた。何かとラナを排除しようとしてきた。暴力的なことをするわけではないが、ちくちくとした嫌がらせを仕向けてくるのだ。おそらく、ラナが自主的に宰相の地位を降りることを望んでいるのだろう。

「よし、会議は終了だ」

ソルの一声が、解散を告げる。ラナは強張った肩を降ろす。とりあえず、絶えず嘲笑される苦痛から解放たれるのだ。各々が立ち上がり、己の仕事場へと向かう。ラナものろとした動きで、椅子から立ち上がる。ユピテルが待合室で待機している。待合室に行つて、ユピテルとさつさと己の家に帰りたい。

今日の会議もすっかりと、馬鹿にされたラナは、トボトボと会議室から出た。

「ラナ様」

ドアを出て気を抜いた瞬間に、誰かに声を背中越しにかけられる。思わず、びくりと身体がふるえた。呼び止めた相手を見るべく、恐る恐る振り返る。本能では、見るな、と叫んでいた。呼び止めた声の持ち主は、何となく予想がついていた。それが的中していれば、ラナにとってその者は、特に苦手とする相手のはずだ。嫌々後ろを振り返ると、灰色の髪の温和な笑みを浮かべる美しい青年が立っていた。

「ラナ殿、本日の会議はあまり元気がないようでしたが、どうかしましたか？」

そう心配そうに聞いてくる奴は、四武将のデイスだ。四武将とは、魔族の中でもひと際強い4名の武将の総称である。特に、目の前にいるデイスは、温和な見た目とは逆に残忍な性格として知られる。

言葉だけ見ると、とてもいい奴に感じるかもしれないが、騙されてはいけない。よく彼を見ると、灰色の瞳には嘲笑がにじんでおり、口元は歪んだ笑みをつくっている。とても、心配しているとは思えない。

一見、爽やかに笑う美しい青年のようだが、腹の中は真つ黒だ。この青年は何かと、ラナを貶めようとする、油断ならない魔族の青年なのだ。

「い、いえ、大丈夫です。御心配おかけしました」

呟くように、ラナは話した。

理由は簡単。彼が怖いからだ。

見た目がやさしげなのに、放つオーラが禍々しいギャップが、何か秘めていそうで恐ろしい。思わず、びくびくとした態度になってしまう。デイスを正視できなく、下を向く。

「それは、良かった！宰相ともあろうお方に、倒れられたらこの魔国はやっていけませんからね」

（はい、嫌味。会議で何もできない私への嫌味ですね、それ）

清しい笑顔で、言っているが、完全に役に立たないラナへの皮肉だ。そのことをちくちくと責めてくる。直接ではなく遠回しに、丁寧に言ってくるものだから尚始末が悪い。

「そ、それほどでも」

「またまた、ご謙遜を」

二人の話している姿は一見、笑顔な宰相と慇懃な態度の武将の会話かもしれない。だが、宰相のラナは冷や汗を流しながら、デイスは嘲りを口に含ませている。

ドクツドクツ!!

心臓の音が大きく鳴るのが、自分でも分かる。手に汗が滲む。手どころか身体全体がふるえてくるのを、どうしても止められない。手をぎゅっと握るも変わらない。早くここから去りたかった。デイスという恐ろしい存在の近くから、一刻も早く逃げたい。

「っでは、ここで失礼します!」

「はい、また」

早口でラナは、別れの挨拶を言った。思いのほかデイスはあっさりとラナを解放する。やっと、ねちねちと攻撃してくるデイスを振り払うことが出来た。ラナはそっとため息をついた。デイスに背中を向ける。そのまま歩き始める。その時後ろからデイスの「さようなら、『宰相』様?」という声が聞こえた。

(・・・やっぱ、あいつは苦手だ)

ラナは、唇を噛む。が、何も言い帰さず、トボトボ回廊を歩き始めた。そんなラナをじっとデイスは見ていた。口元を弧に描いて。

？

「なんだ、お前あのへっぴりに興味あるのか？趣味悪いな」

ソルはデイスにニヤニヤと笑いながら、話しかける。紅色の瞳は、  
獰猛さを宿している。褐色の肌をした屈強な体つきからは、彼の強  
さがうかがい知れた。少し己より背が高い魔王を見て、デイスは微  
笑んだ。

「僕、弱いもので遊ぶのが好きなんです。ほら、壊れるか、壊れな  
いかのスリルが楽しいでしょ？」

「そんなもんかねー？俺は強いものを壊した方が、やりがいがある  
と思うがな」

「ふふつ。まあ、それぞれですから。それに、あの宰相殿は、特に  
弱い。じわじわと苦しめていくのが、おもしろいのですよ」

デイスはくすくす笑いながら、ラナが歩いた回廊を見た。もう、ラ  
ナは見えなくなっていたが、彼には見えるともいうように。灰色  
の瞳に残虐さをもとして。

∞  
∞  
∞

ラナは、鬱々とした気分を持て余しながら、ゆっくりと回廊を歩い  
ていた。気分は、最悪である。会議ではいつもであるが無視される  
し、最後までデイスにからかわれた。

スッ

スラッとした長身に見合う長い足で誰かが、ぽてぽてと歩くラナをすぐに抜かしていった。カイルスだった。ラナを抜かす間際、カイルスと目があつた。アッシュグレーの瞳に映っているのはラナに対しての『無関心』だった。絹のような美しい薄い水色の髪をなびかせ、カイルスはすぐに先に行ってしまった。

氷のような冷たい美貌の彼は、ラナと同じ宰相という地位にいる。この魔国では、宰相は二人いるのだ。彼はラナと同様、宰相という役柄につく一族の者である。ラナと決定的に違うのは、彼がとても優秀であり、魔族たちや魔王の信頼が厚い、という点だろう。

カイルスは、ラナに対してデイス達のようなことは何もしてこない。代わりに、彼はラナ何の関心も抱いていない。というよりも、ラナが存在しないように、徹底的に無視を貫いている。彼にとっては、同じ宰相に就任している役立たずのラナが、見るに耐えられないのだろう。

（愚弄されると、無視されるとどちらが良いのかな）

ラナは、カイルスの遠ざかる背中を見ながら考えた。

「おい、最弱宰相様のお通りだぜ？」

「まったく、早く消えないかな」

「見苦しいったら、ありやしないわ」

ひたすらユピテルがいる待合室までの回廊を歩いている間、魔族たちの声が聞こえる。途中すれ違う魔族たちは、ラナへの蔑みの視線を隠そうともしない。普通、宰相という地位に居る者になれば、お辞儀の一つもするはずだろうが、それもない。ただ、小声でラナをせせら笑う。

ラナは、下向きに歩いた。エドモンドやアリーに会いたい。あの温かな空気の中に早く行きたい。ぼんやりと思いつながら。

（早く、帰りたい）

ラナは早歩きになるのを、止められなかった。待合室が見えてくる。待合室のドアを開くと、ユピテルが心配そうにしながら待っていた。せわしなく部屋の中を飛び回っている。ドアを開けたラナを見ると、ユピテルはぴきつと固まった。羽ばたきまで止まったので、とすん、床に小さな身体が落ちこちる。だが、視線はラナに向けたままだ。ラナの顔色があまり良くないのを見て、何があったのか察したようだ。

「ラナ様・・・」

「ユピテル、帰ろう。会議は終わったよ」

ラナはユピテルの言葉をさえぎった。こんなものいつものことだ。皆

に馬鹿にされることは、なんてことはない。

笑顔を作って、ユピテルを見たが、上手くできていない気がする。

「はい」

何か言いたそうな顔したが、ユピテルは何も言わずに頷いた。

待合室を出て、城の屋外に出る。そこを守っていた兵士たちが、意味深にラナを眺めてくるも何も言わなかった。飛んでいたユピテルが、振り返りラナにつかまって、とばかりに脚を出す。ラナはユピテルの脚をつかんだ。ふわり、とラナの身体が浮く。そのまま上昇していく。感じるのは、風と冷やかな視線。ラナは無言で城を離れた。

∞  
∞  
∞

魔国を離れ、1時間ほどがたった。ラナたちはまだ飛んでいた。もう、時刻は夕方で、目の前には赤い夕焼けが広がっている。ユピテルは明るい声で、ラナにひっきりなしに話しかけた。

「今日の夕食は、タイロンが腕によりをかけたビーフステーキだそうです。デザートはチョコプレートケーキですって。きっと、美味しいですよ！」

「うん」

「シェリーが夜にトランプゲームをしよう、と言っていました。私とフリッグも混ざります。楽しみですねー！」

「うん」

「あ、明日は午前だけのお勉強にして、午後はピクニックに行きましよう！今日は頑張りましたから、御褒美です」

「うん」

ラナは、魔族たちの自分の扱いにへこみ、他のことはあまり考えられない。ぼんやりと返事をする。ユピテルは、ラナを元氣付けるのを諦めたのか、黙り込む。そして、ポツリと話す。

「・・・ラナ様、夕焼けがとても綺麗ですね。きっと、明日はいいことがありますよ？」

ユピテルは眩しそうに、目の前の夕焼けを見た。ラナもつられて、まじまじと夕焼けをみる。

広大な空の下には、大草原が広がっている。太陽はこれから沈むというのに、なんだか日中には無い力強さが感じられた。まだまだ、これからだ、とでも言うように。

「そうだね」

ラナはそっと目を閉じた。目を閉じて、真っ赤な夕焼けが強く強

く感じられた。まるで、ラナに『これからだ』と元氣付けるように。

？

宰相であるラナの朝は、早い。ラナは本当はもつと寝ていたいのだが、周りがそうは問屋がおろさない。

「ラナ様~~~~！！朝です、起きてくださいな！」

そう言つて、ラナにかけられた毛布を剥ぎ取ってきたのは、メイドのシェリーだ。カールした亜麻色の髪をひとつにくくり、ぼんきゅつぼんな体系は、実に羨ましいとラナは思う。

陶器のような白い肌に、少しつりあがったアーモンド形のエメラルドグリーンの瞳である彼女は、どこからどう見ても、美女だ。

だが、色っぽい見た目に反して、中身は男らしい性格だったりする。

「うーあと、5時間・・・」

「そんなに寝て、どうするんですか！さあさ、早くベットから出てください。シャツが洗えないでしょ？」

「むー」

ラナは、目をこすりながら、緩慢な動作で起きた。

「早いよう、シェリー」

「いつもの起きる時間ですよ。また、昨日夜更かししてたでしょう？お部屋から光が夜遅くまで漏れていたのは、知っていますよ！？」

そう言つて、腰に手を当てて怒るシェリー。胸をはる姿勢になるの

で、自然と大きい胸が誇張される。

「えいつ！」

堪らずポスンと音をたてて、ラナはシェリーの豊満な胸に顔を埋めた。

（うーん。いい匂いと柔らかな感触が、たまらない！）

ラナはそういう趣味はない。ただ、彼女の魅力的な胸は、誰だって触りたいと思うはず！とラナは言い訳をしている。

時々、シェリーに抱きついたりしているが、シェリーは構わずラナをぶら下げたまま掃除や洗濯などのメイドとしての仕事を着々とこなす。小柄なラナは、コアラのように彼女にひつつくのが好きだ。小さい時から、母はよく放浪の旅に出て行ってしまうので、寂しい時はシェリーに温もりを求めたものだ。彼女はラナにとって、母や姉のような存在でもある。

以前ラナはこのことをエドモンドに話したところ、彼は非常に羨ましがっていた。

今日も、胸にラナの顔をうもれさせたままシェリーは、構わずシートなどをはがし、洗濯籠に入れた。そのまま張り付くラナを洗面所に連れて行き、ラナの身支度をさっさとさせてしまった。いろいろ見事なメイドだ。

シェリーにせっつかれてダイニングルームに行くと、既にユピテル

とコックのタイロンが待っていた。強面でかつ牛のような角を頭から生やし、巨大な体躯を持つ彼だが、作る料理は見た目も味も繊細なのだから、世の中不思議である。

「ラナ様、本日の朝食はラナ様のお好きなスクランブルエッグやスコーン、野菜スープにデザートはいちごですよ」

そう言うタイロンの笑みは、どう見ても凶悪犯罪者が悪業を思いついた時の笑みにしか見えない。実際は、一番涙もろい優しい性格なのだから、不憫な奴だとラナは思う。

「はい」

ラナは、席についた。

「いただきます」

食事の挨拶を元気にして、ラナはさっそく食事にありついた。

「おいしー!!」

タイロンのつくる料理はとても、美味しい。アリーも料理上手だが、やはりタイロンが一番上手だ。アップルパイはアリーの作ったのが、ダントツだが。

幸せそうに食べるラナをこの城に仕える魔族たちは、暖かく見てくれている。エドモンド達も大好きだけど、ラナはこの城の皆も大好きなのだ。

「ラナ様、本日は宰相としての礼儀作法を学びますからね？」

「はい」

勉強は嫌だが、朝食がおいしいので良しとしよう。ラナは満足げに頷いた。だが、ラナはすっかり忘れていた。ユピテルが施す学びを、厳しさを。

「ラナ様、背筋はしっかりと伸ばして！！手先まで意識して！」

ユピテルは、意外に作法には厳しかった。さつきから、細かいミスにまで叱責がとぶ。ラナは、ひーひー言いながら、ユピテルの作法の学びを受けた。少しでも気を抜こうものなら、鞭がとんでくるのだから、ひどい。

（うわーん！鞭が怖いよう！）

ラナは、齒軋りした。だが、ユピテルの持っている鞭が怖いので、逆襲はできない。

ラナが、ユピテルのスパルタレッスンを受けていると、「失礼します」と部屋にフリッグが入ってきた。フリッグは、この城の庭師だ。彼は、おっとりした性格で、とても植物が好きだ。ちなみに彼の専用の庭には珍しい植物がたくさん植えられている。以前ラナが、見に行つて人食い花に襲われて以来、もう絶対近づくものかと、ラナは誓っている。

「ラナ様にお客様です」

いつも穏やかな彼が、今はすこし焦ったような表情だ。それだけで、来たお客というものが良くないものだ、と分かる。

「ええと、誰が来たの？」

ラナは恐る恐る質問する。そんなラナを気の毒そうに、フリッグは見た。

「四武将のヴィクトリア様とクロノス様です」

「・・・体調が悪いので、会えませんと伝えて」

「ダメです」

逃げようとしたラナの意見をユピテルは、一刀両断した。

？

ドアに走って、脱走しようとしたラナを、無情にもフリッグがラナの両脇を捉えて、捕まえてしまう。フリッグは申し訳なさそうに、糸目の目尻を下げた。

「すみません、ラナ様。ですが、お会いしたほうが、よろしいかと・・・」

「会いたくない！！だって怖いようっ！」

ラナは泣き声で、抗議する。ユピテルは、容赦なく言い放った。

「しょうがありませんよ。来られてしまったのであれば、一族の長らしく対応しませんと。またなめられてしまいますっ！！」

「もう、既になめられている気がしますかね」

「フリッグ、黙りなさいっ！」

フリッグは、涙目になっている主を眺めて、苦笑した。「嫌だ嫌だ」と来客者に会うのを渋るのは、ひとえに小心者の為、来客者に畏怖しているからだ。魔族の虐めに泣き、弱虫な態度の主を見下し、また魔族たちがラナに辛く当たる、という悪循環が繰り返されている。

ユピテルらは逃げ腰になり、行きたくない、怖い、と喚くラナを客間まで引きずっていった。ドアからは、二人の強い魔力がビシビシ感じられる。その魔力の強さにビビって、また泣きそうになるラナ。だが、いつまでも二人を待たせて、機嫌を損ねられても、怖い。観

念したラナは、客間のドアを開いた。中にいたヴィクトリアとクロノスが一斉にラナに視線を向ける。

「あら、ラナ様。お邪魔しておりますわ」

膝丈のスカートの端を持ち上げ、礼をする。

そう言つて、勝気な笑顔で笑うのは、ヴィクトリアである。四武将唯一女性の彼女は、意外に攻撃的らしい。銀色の髪をツインテールにし、短いスカートを履き、いつも日傘をもつ彼女は一部の魔族たちに変人気だと聞く。ルビー色の瞳は、ラナを見下した色にじませているのがありありと伺える。

「・・・失礼する」

もう一人、寡黙な印象を受ける青年は、クロノス。背が高くがっしりとした体型ながらも、暑苦しいところはない。茶色の短髪は精悍な顔によく似合っている。

「わ、わがミーミル城へようこそようこそ、おいでいただきました」  
ラナは背筋を伸ばして、挨拶した。だが、語尾がふるえてしまうのは、どうしようもない。

「ミーミル『城』ねえ・・・。ここへ参る時、周囲を見回したしましたが、どう見てもここはお城には見えにくいですわね」

「あははは・・・」

「それに、兵もいないなんて！ここはどうなっておりますの！？」

ラナはヴィクトリアのキツイ質問に、乾いた笑いで返した。ヴィク

トリアの言つとおり、ラナー族であるスヴァルト・アールヴヘイムのかまえる家宅は、城と呼ぶにはいささか小さい造りだ。館と呼んだほうがいいかもしれない。普通、魔族の構える城は、堅固である。だが、レンガ作りで、フリッグが植えた草花があちこちを彩っている様は、威厳といった類のものはまず感じないだろう。きっとこの館を見る者は、先に可愛らしさとかオシャレな印象を受けるに違いない。堅固さはまったくない。しかも、兵士といったものはいない。何故なら、ここにはラナと数人の使用人しかいないからだ。

「す、すみません」

「まあ、ラナ様らしいですが」  
ヴィクトリアは鼻で笑った。

「・・・あのー、それで用件は何でしょうか」

ラナは、慎重に二人に聞いた。  
遊びに来ました、なんてことは絶対はない。  
悲しいことに、ラナと親しくする魔族なんて、この城に居る魔族以外いないからだ。  
というか、魔族に友達はいない。そんなことを考えていると、だんだんラナは悲しくなった。

「ええ。次の会議の日程が決まりましたので、お知らせに参りましたの」

「そうですね。ありがとうございます。御足労をかけたようですね。書簡でもよろしかったのに」

書簡は、魔術式が記された専用の台を通して、送られてくる。術式が円を描かれていて、術式が囲っている真ん中から、書簡を送ったり受けたりするのだ。ラナに送られてくる魔国からの書簡は、適当に会議のある日時だけを乱暴に書かれたものが、いつもおざなりに送られてきていた。いつもなら、挨拶文などない書簡が送られてくるはずなのに。ラナは、彼らを訝しんだ。

「いえね、近くに用事があったものですから、ついでに参りましたのよ」

そう言つて、ヴィクトリアは意味深に笑った。瞳と同じルビー色の口紅をひいた口元が弧を描く。

「用事……ですか？」

「ええ。人間どもが浅はかにも、我ら魔族に反抗した地域がありまして、肅清に行ってきたのですわ」

ラナは、頭が真白になった。

（しゅくせい……？）

「何を……したのです？」

喉がカラカラになっている。声がかすれた。

「何、愚かな人間どもを半殺しにしたまで」

少し、散歩しにいきました、というような軽いノリで言われた。

「ふふ、本当に人間は脆弱な生き物ですわ。強い者がすべてなのです。弱い者は生きる資格などない。せめて、強者にへりくだって、いればいいものを」

（なんで、そんな風にいうの？）

ラナの唇がわななく。

「本当は、半殺しなんて半端なことをしたくはなかったのですが、脅しのためには一応生かしておいた方が、効果的だと判断しましたの」

（簡単に、殺すなんて）

「ああ」

そこで、ヴィクトリアはわざとらしく、青白くなっているラナを見た。

「そういえば、ラナ様は人間どもに親善派なのでしたね？失礼しましたわあ」

そう言って、笑うヴィクトリアを見て、ラナは気付いた。

ヴィクトリアらは、人間を擁護するラナに嫌がらせするために、あえて人間をいたぶった後に来たのだ、と。

ラナの体がふるえた。

なんということを、したのか。人間だって、魔族と同じ心があり、生きている存在なんだ。命に魔族も人間の無い。どちらも貴重な命だ。なのに、平然と「殺す」などと語るヴィクトリアに恐怖も感じる。彼らにとって、命などそんな程度のものなのだろう。

（怖い・・・！）

魔族に対する畏怖が、ラナを襲う。何でもないように、命を奪ってしまうような相手と一緒にいたくなかった。必死に体のふるえを抑えようとするラナをみて、ヴィクトリアは満足げに笑った。クロノスは興味がないのか、無表情にヴォクトリアの隣りで佇んでいる。

（こいつら腐ってる）

彼らに対する怒りもある。だが、それを口にする勇氣はなかった。

「あら、ラナ様そんなにふるえてどうしましたの？ か弱いラナ様には、血なまぐさいお話しでしたかもしれないね。ごめんなさい。それなら、私たちはもうお暇しますわね？」

ふるえるラナを見て、ヴィクトリアは満足したらしい。ラナへの嫌がらせという目的を果たしたヴィクトリアらは、さっさと帰ることにしたようだ。

「会議は、次の満月の翌日ですね。時刻はいつも通りです。では、また魔国城でお会いしましょう」

優雅にヴィクトリアは礼をした。クロノスも彼女に合わせ、目礼を

する。

ヴィクトリアは背中から紅の羽を出し、クロノスは茶色で巨大な翼を出して浮かびあがった。彼らの後ろに、黒い渦生まれる。

ヴィクトリアはそこで、思い出したように笑った。

「あ、そうそう。弱い者が生きる資格なんてない、というのは魔族でもそうなのですよ？」

それは、冷たい笑みだ。

「例え、宰相様だとしても、ね」

そう、彼女は言い残し、クロノスと共に渦をくぐる。一瞬で、二人は消えていた。冷たい風が、ラナの頬を撫でる。

ラナは、握り締めていた手をだらりと下げた。その時初めて、己が手のひらをきつく握りしめていたことに、やっと気づく。

「ラナ様・・・」

部屋の隅に控えていたフリッグがそっと、ラナの背中をさする。ユピテルも飛んできてラナを正面で心配そうに見る。

「大丈夫」

ラナは、ユピテル達を安心させる為に、無理やり笑った。

？

今日は、このビフレスト領ではちょっとしたお祭りがある。

選ばれた数人の乙女が町のなかを練り歩き、花びらをまく、というだけのものなのだが、お祭りは魔国には無い習慣なので、ラナの毎年楽しみにしている行事の一つだ。数々の出店、また曲芸や奇術をする見世物が並び、町全体がにぎわう雰囲気がとても、わくわくするのだ。この日は、皆開放的になり、笑顔で知らない人にも挨拶する。

「エドモンド！あのお店行こう！」

「また、食いもんじゃねーかよ！お前どんだけ食うんだ！？」

この町の人と同様、ラナも開放的な雰囲気を楽しんでいた。さつきからエドモンドを引きずって、数件食べ物の出店をまわっては、買い食いしている。

「ふふん！乙女の胃袋はブラックホールなのだよ」

ラナが、チツチと指を振りながら言うと、エドモンドは

「お前だけだろう？」

と呟く。ラナは無言でデコピンをお見舞いしてやった。

「アリーも来ればよかったのに」

「姉さんは、プラムさんとまわるからな」

「プラムの奴めっ!」

「おいおい」

エドマンドは呆れたように、笑った。

プラムはアリーの婚約者だ。すぐに、というわけではないらしいが、いつか二人は結婚するのだろう。

ラナはなんだか、姉を奪われた気がして、気に食わない。

「祝福あれー、祝福あれー!!」

ラナが唸っていると、花びらをまく乙女達の一団が近づいてきた。ラナとそう変わらない年代の少女たちは、綺麗におめかしされて、頬を染めながら花びらを一生懸命まいていた。

可愛らしい声で「祝福あれ」と言いながら、花びらをまく初々しい少女の姿は見る者を笑顔にさせる。

「いいなー。私もあれしたいな」

「花びらまく乙女?」

「うん!」

「ぶふっ!」

「何で笑う?!??」

乙女の夢を笑うなんてっ！ラナはしばらく、すねていた。何も話さず、頬を膨らませて歩くラナ。そんなラナを見かねて、わるいわるい、とエドモンドはクレープを奢った。

二人は小さい頃からつるんでいる。怒ったとしても、相手が何をすれば喜ぶかは心得ている。エドモンドの思惑通り、ラナは「しょうがないから、大目にみてやる！」とクレーズを美味しそうに頬張った。その後も、出店や見世物を楽しんだ二人は、夕飯代わりの野菜を挟んだパンを買い、公園に行った。

公園の芝生に座って食べていると、夕日が沈み、花火が次々と打ち上げられた。

「エドガモンド！今の花火凄かったね！！花の形をしていたよ!？」

「ああ、そうだなー」

すっかり、はしゃぐラナ。エドモンドは、静かに花火に感銘する。いろんなことに騒いでは目を輝かすラナと、そんなラナにつれられて相槌をうつエドモンド。いつもラナがエドガモンドをつれまわしては、二人で様々な遊びをした。この二人の関係は、小さい頃から変わらない。ラナがエドモンドにもつ意識は、家族のようなもので男女間のものにはならないだろう。きっと、エドモンドもだ。ビビリなラナだったが、エドモンドやアリーだけは怖がった事は無い。

花火に見入っていると、隣りにいるエドモンドが話しかけてきた。

「ラナ。・・・お前、最近どうだ？」

「最近？」

ラナはいきなりの話題に思わずエドモンドをみたが、エドモンドは、ラナを見ないで視線は花火に向けられたままだ。

「おう。仕事とか」

「・・・・・・・・」

あまり、宰相としての仕事のこと、ラナの待遇はエドモンドには話してない。だから、かえってエドモンドが何を聞きたいのか、思いあぐねた。

そんなラナにかまわず、エドモンドは話し続けた。

「お前がさ、先代様のあとを継いで宰相になったばかりのころ、お前スゲー暗い顔色だったんだぜ？」

気付かなかったか？と笑うエドモンドは、やはりラナを見ない。

「今はそんなことは無いけど、時々不安そうに考え込む時がある。なんでもないように振舞っていたけど、お前顔に出やすいからな！モロバレだったぞ。姉さんだって、気付いてたぜ、あれ」

「エドモンド・・・」

ラナは、上手く話せなかった。

「日に日に暗くなるお前を見て、何もできない不甲斐なさとか感じるときもあってさ、一時期スゲーむかついた時もあった。お前は全然そついうこと話さないし。でも、お前が一生懸命戦っていたのは

感じたから、何も言わなかった」

「うん」

「今でも、俺は何もしてあげられねーけどさ、

――俺はお前の味方だ」

「・・・うん」

喉がひくつく。いつのまにか、目から涙が流れていた。嗚咽が時々漏れてしまう。エドモンドはやっぱり、ラナを見ない。それが、泣き顔を見られるのが嫌な意地っ張りなラナへの配慮なのだと、気付いた。エドモンドは優しく微笑んだまま、花火を見続ける。

宰相になって、魔族たちから見下される日々。とても、辛くてユピテル達には、魔国城にいきたくない、とゴネたこともあった。魔族たちから嘲笑されるたび、胸が酷く痛んだ。今だって、本当は辛いのだ。

でも、エドモンドにはそんな姿見せなくなかった。彼も伯爵の子として、大変なこともあるのに頑張っているのが分かったから、自分も頑張ろうと思ったのだ。エドモンドだけとは、同等にいたかった。

でも、エドモンドは味方だと言ってくれた。それだけで、今までの  
ラナの頑張りが救われたような気がした。

花火が打ち上げられる度に、周囲からは歓声があがる。

人々は終始笑顔で、見ているこっちが幸せをもらった気分になる。

母親が7、8歳位の娘と手をつなぎ、花火に歓声をあげる娘を愛し  
そうに見ている。老夫婦は公園のベンチに座り、楽しそうに話して  
いる。若い恋人が、お互いに頬を染めて手をつないで歩いている。

この風景のすべてが、ラナには苦しいほど大切だ。  
少しとして、失くしたくない。  
こんな世界を壊したくない。

ラナはそつと目を閉じた。

魔族たちは容赦なく、この世界をぶち壊そうとしてくる。  
でも、絶対に守ってみせる。ラナは強く決心した。

ラナの近くで、一陣の風が舞った。



？

『いい？誰にも優しくしなきゃだめよ？』

そう人指し指を立て言うのは、ラナの母であるユノだ。

ラナと同じ黒髪黒目の母は、いつもラナのあこがれだった。

『忍耐強くありなさい。すぐに怒ってはだめよ』

よくユノは、小さいラナを旅に同伴させ、いく先々で稽古をつけてくれた。その時、ユノはいつもこのことを繰り返すようにラナに伝えたのだ。

懐かしい姿のユノは、さらに話を続けた。

『でもね、どうしても怒らなくてはいけない時は、———』

パチリと目が覚めた。昔の夢をみていたらしい。とても懐かしい。ラナは、ベットの中で横たわり夢の余韻をしばらく味わった。

母は、ラナが10歳の時に、ラナを置いて旅に出かけてしまった。それまでは旅と一緒に連れて行ってくれていたのに、ぱったりと姿を現わさなくなった母。最初は寂しくて、泣いていたが、ユピテル達がなぐさめてくれ、今では母のことを思い出すと『悲しい』というより『懐かしい』という思いになる。

ラナは、大きく伸びをする。そして、着替えるべく、ベッドから出た。

魔国城での会議の日、いつもより早く起きたラナをシェリーは心配した。

いつもならシェリーに叩き起こされているのに、今日は一人で起きたからだ。

「な、何か、悪いものを拾い食いしましたか!？」

「食べてないよ!失礼な。私だって起きるときは、一人で起きれるんだから!」

しきりに心配するシェリー。いつもとは逆にラナが、尚もおかしいとラナにすがりつき引き下がらないシェリーを引きずる。

「何言っているんですか!そんなこと今までありませんでしたわ!？は!きつと、ラナ様に何かを取り付いたとか・・・!」

「何だよっ!起きちゃいけないのかよー!!」

ずるずると、腰に手をまわすシェリーを連れて、ダイニングルームに向う。ダイニングルームに着くと、食事の用意は既にされている。タイロン特製ホットケーキを急いで、たくさん胃袋に入れる。魔国城までは遠い為、早くにここを出なくてはならない。朝ごはんを掻き込み、ラナは魔国城に行くべく支度を万全に整えた。

「よっしやあ！！行くぞー！！！」

乙女らしからぬ、雄たけびをあげたラナをユピテルたちはキョトンと見た。

「今日は何やら、やる気満々ですね。ラナ様」  
ユピテルは、ぱたぱたとラナの周りを飛び回った。

「まあねー。今日の私は一味違う。会議頑張るもんねー」  
朝の母の夢は、ラナを後押ししてくれた気がする。

「そうですか、ユピテルめも応援しますよ！」

「うん！」

思わず、えいえいおー！と言って、腕を振り上げたラナを見て、ユピテル達も一緒に「おー！」と腕を上げてくれた。  
ラナは嬉しくて、思わず5回同じことを繰り返した。

魔国城までは、ユピテルの翼で3時間くらいかかる。意外にラナの城と魔国城が近い、というわけではなく、ユピテルのスピードが速いのだ。

魔国城に着くと、衛兵がラナを出迎えた。

「おはようございます、宰相様。相も変わらず、可愛い魔力ですな」

少し偉い地位にいる衛兵が、笑顔で嫌味を言ってきたが、今日は全然気にならない。

「いやー、それほどでも」

ラナは満面の笑みで、答えた。

いつもなら、おどおどして「そうですか？」くらいしか言わないので、その衛兵は驚いたように目を大きくさせた。すぐに、面白くなさそうにして、「会議室にお連れします」とぶっきらぼうにこたえる。

ユピテルとは別れ、会議室に向かうラナを、すれ違う魔族たちは冷たい目で見してきた。  
でも、もう気にしない。

『俺は、お前の味方だ』

ラナはエドマンズの言葉を心のなかで繰り返した。

「ラナ・アールヴヘイム様が入られます」

会議室のドアが開けられ、魔王や、宰相のカイルス、それに四武将たちのそうそうたるメンバーがずらっと円卓に座っている。彼らの巨大な魔力で会議室は満ちていた。

ラナは大きく深呼吸した。

視線は、下げなかった。

「魔王様、皆様、おはようございます。私が最後のようですね。遅くなり申し訳ありません」

確か、会議が始まるにはまだ時間があるはずだが、ラナ以外は皆もう既に集まっていた。

「別に構わないぜ？もう会議は始めていたからな」  
魔王様は、ラナを一瞥して言い放った。

（・・・もう既にイビリは始まっていたのかー！）  
出鼻をさっそく、くじかれた気分になる。

おそらくラナに伝えた会議の時間は、実際に会議が始まるのより後の時間を教えたのだろう。

「そ、それは良かったです・・・？」

ラナはとほほと心で呟きながら、いつも指定のイスに座った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9900y/>

---

最弱宰相は奔走する

2011年12月2日08時46分発行